

書 評

服部リハビリテーション技術全書 第3版

蜂須賀研二●編

大丸 幸, 大峯三郎, 佐伯 寛, 橋元 隆, 松嶋康之●編集協力

〔評者〕芳賀信彦(東大大学院教授・リハビリテーション医学)

東大病院リハビリテーション部の本棚に、『リハビリテーション技術全書 第2版』(1984年発行の第1刷)がある。おそらく今までに東大に所属した多くのスタッフが手にしたであろう汚れ具合で、勉強会に使用したと思われるプリント類も挟み込まれている。私と同世代のセラピストに聞くと、皆学生時代からこれで勉強してきたという。「いよいよ第3版が出たのですか」という声も聞こえてきた。

『リハビリテーション技術全書』は、九州帝大医学部から九州労災病院の初代リハビリテーション科部長を経て長尾病院を開設された服部一郎先生が、約10年かけて医師とセラピスト両方に向けて書き上げた教科書で、1974年に初版が出版されている。第2版までは服部先生が中心となり執筆されたが、亡くなられた服部先生に代わり、第3版は蜂須賀研二先生(産業医科大名誉教授)がまとめられた。北九州地区を中心に60名を超える先生方が執筆されてお

り、まさに九州魂が込められた大作である。

第3版では内容は一新されているが、服部先生の当初のコンセプト、すなわち自身が永年の経験から築き上げた理論と技法に、他の専門家の方法を追加引用し、多くの図表とともにわかりやすく解説する、という方針は守られている。特筆すべきは、服部先生のオリジナルの図が多く継承され、さらに進化していることである。本書には写真が全くない。写真でなければ伝わりにくいこともあるが、イラストであるがゆえに着目すべき点が強調され、読者の頭にすっと入ってくる。例えば片麻痺患者の起立訓練の図では、第2版では麻痺側の左に色が塗られているのみであったが、第3版ではこれに加えて違う色に塗られ、セラピストがどこに力を入れるかが矢印で示されている。細かい工夫であるが、読者の視点に立った見事な対応である。

総論は蜂須賀先生を中心として、時代に即した内容に大幅に書

き換えられている。「問題患者」というユニークな章もあるが、これは第2版の「問題のある症例の取り扱い方」の章を発展させたものであろう。総論の中で私の興味を引いたのは、リハビリテーションカンファレンスに関する記述である。「カンファレンスはよいことばかりではなく、高いコスト、効果が不明確、長い時間の確保という問題を合わせもっている」として、コストをどう考えるかが説明されている。私自身もカンファレンスのあり方に悩んできていたので、蜂須賀先生の考え方は大変参考になった。

このように医師、セラピストの両者に大いに役立つテキストは、日本はもちろん海外にも存在しないであろう。ぜひ手元において、日常診療に役立てることをお勧めする次第である。

B5 1,024頁 2014年
定価：本体18,000円＋税
[ISBN 978-4-260-01757-2]
医学書院 刊